

建築主：学校法人 日本大学
 設計：日本大学理工学部 坪山幸王
 株式会社 梓設計
 施工：西松建設株式会社東関東支店
 所在地：船橋市習志野台7-24-1

『ショーケース』としての多様な実験・実習施設

日本大学理工学部テクノスペース15



マルチホールの西側全景（撮影 平井広之）

この作品は景観の部で表彰すべきか、あるいは環境の部で表彰すべきか議論があった。そのいずれにせよ、建築文化賞に値する力作であったことには誰も異存はなかった。

外部に開放するコンセプトに貫かれた大学の施設としても、あるいはその構造・環境技術的な先進性や優れたデザイン性においても、それほど応募作品の中で出色の作品であった。

大学のあり方が大きく変わることを求められている。それは本来の研究教育はもとより、その根本は社会に対する関係性を開くことであり、立地する地域に対して能動的に貢献することである。

この作品を特徴づける軽さや開放性は、単なる意匠上のファッションの類ではなく、建築の資源性に対する洞察から発した合理的な構造形態を追求した結果である。理工学部の実験・実習施設という閉じた学校棟屋のイメージが、ここでは軽やかでおおらかな曲率を描く膜とガラススクリーンによって見事にくつがえされ、そして開かれた。

コンセプトの建築的な表現は、たとえば夜間の美しい環境的な景観の創造をも生み出したのである。

こうして作者の意図と力は、環境的な課題やユニバーサルデザインなどといった社会の要請にも誠実にこたえながら、大学の施設として稀有な空間を作りだした。従来の閉じた大学



◀ コンコースレクチャーホール側内観
 海洋建築水槽実験室内部 ▶

のキャンパスの中にある建築に景観の部がふさわしいのかという議論や、建築内部に取り込まれた景観の意味合い等、この作品のカテゴリーは一筋縄ではいかない。しかし、結局は環境の部で表彰すべきという意見が大勢を占めた。

こうした議論そのものが、本作品の持つ価値の多重性を示しているといえるだろう。

（岩村和夫）

